

本連載ではこれまで「おふでさき」第一号を冒頭から二・三首ずつ見てきたが、今回からは我々のレンズを手前に引いてもう少し巨視的な視点から「おふでさき」を読んでいきたい。というのも、これまで見てきたように「おふでさき」はその一首だけを見ても汲み取るべき意味は深淵であると感じられるが、それでいて各首は完全に独立しているわけではなく、「おふでさき」全体の流れにおけるその一首の位置づけを考慮することも必要だからである。

また、これまで「私」が他所から仕入れた思考の道具立てでもって「おふでさき」にアプローチしてきたが、全体の流れを考慮するという点に関連して今回からは「おふでさき」をより内在的に理解していきたい。それは各首を理解するうえでの参照点を他所に求めるのではなく、「おふでさき」自身に説明してもらおうという方法である。これまでのようなマイクロな視点で二・三首に焦点を合わせたり、他所のアイデアを引用する方法はその都度必要に応じて取っていききたい。

それでは「おふでさき」第一号の構成から見ていこう。第一号は全部で七十四首あるが、各首は意味内容の上でいくつかのグループに分けることができる。グループの大きさは最小で一首、次のレベルでは我々が見てきたような二・三首であるが、同じ主題を持つという点では五首から十五首前後のグループに分けられる。先行研究を参照すれば、それはおよそ次のようになる。

- (1) 親神による世界の救済の宣言 (1～9)
- (2) 「かぐらづとめ」の不思議な効能 (10～20)
- (3) この世は「理」の世界 (21～28)
- (4) 「屋敷の掃除」 (29～38)
- (5) 親神の言うことに間違いはない (39～44)
- (6) 「道」の比喻 (45～57)
- (7) 「うち」を治める (58～74)

我々はこれまでに(1)と(2)を見てきた。まとめると、「これから世界を救済する、勇ませる」と宣言する親神は、その具体的な方法として人々に「かぐらづとめ」の実行を促す。そして次にその救済の筋道を人々に納得させるために(3)この世は「理」の世界であることを説明する。それはこの世の成り立ちはすべて親神の心や働きを基礎にしていることを意味し、物の間では物理といわれ、人々の間では道理といわれるような原理原則のすべては一つの「理」に基づいていることを示している。

その際、「おふでさき」はそのような親神の「理」をただ整然と言葉で述べているのではなく「屋敷」と表現されるような具体的な状況に即して明らかにしようとしている。「屋敷」とはそのまの意味でいえば「敷地付きの家屋」という意味であるが、「おふでさき」では第一に中山みきが住まいしていた中山家を指す。と同時に、当時中山家があった村の名前を「庄屋敷村」(大和国山辺郡庄屋敷村)と呼んだことから、二義的には中山家を同心とするもう少し広い範囲にも解することができる。そして、「おふでさき」は親神の「理」というものを「せかい」(人間一般)に伝えるために、それを当時の中山家の状況やそこに集う人々の事情や心境に代表させて説いている。

それでは(4)「屋敷の掃除」とはどのようなことであろうか。「掃除」とは親神の「理」(あるいはその思い)を人々に伝える

ことの比喻である。先述したように親神の「理」とはいわば「かぐらづとめ」による世界の救済のための筋道・成り立ちとでも理解できるが、そのことを理解できない人間はその「理」に自分が基礎づけられていると諭されることを拒み、これまで通りの生活を営もうとする。特に、親神の提案がそれまでの慣習や常識と異なればなおさらである。このような人間の状況を「おふでさき」は例えば「せかいなみ」という言葉で表し、あるいは親神を疑う人間の心のありようを「ほこり」に例えて「掃除」する対象としている。そして、(5)親神の言うことに間違いはないと説いて、疑う人々の心の改心を度々促している。

ところで、このように「おふでさき」は明治初期の大和の中山家という極めて特殊な状況をモデルにしながら話を進めている一方で、具体的なレベルにおいても全世界を対象として親神の思いを述べていることが窺える。例えば、第一号では、(6)色々な「道」の有り様に例えて信仰のプロセスが示され、「屋敷の掃除」という内々の事情から離れてより一般的なテーマが展開されている。つまり、「おふでさき」で読み取れる親神の眼差しは具体的な事柄を問題にしている際にも常に広い範囲を見渡していると言えよう。

このことで特に注目したいことは、第一号では「万世の世界を見晴らす」という表現が頻繁に使われていることである。まず、「万世の世界一れつを見晴らしたが、親神の胸の内を分かった者はない」(第一首)と冒頭から世界中の人間を視野に入れて話を始めている。続けて、「かぐらづとめ」や「理の世界」、「屋敷の掃除」の話題について触れた後、「万世の世界中を見渡せば、道の次第も色々にある」(第四十五首)と、先述したように人生の歩み方や人間の親神の「理」を感得するプロセスを「道」に例えて示している。さらにその歌のすぐ後で「万世に世界のところを見渡したが、悪しきの者は露ほどもない」(第五十二首)と、「屋敷」の内らの人々だけでなく、世界中の人間を対象にして、「あしき」というような根源的な悪を否定している。このような親神の態度は「何も知らないが無理はない」(第二首)と同じといえよう。そして、第一号の最後には「道」の比喻から再び「屋敷の掃除」へと話題が転換するが、「屋敷」の内らの人々に親神の「理」を諭す文脈においても「万世の世界の事を見晴らして、心しずめて思案してみよ」(第六十九首)と、人々に世界中の人間を見渡す視野で物事を見ることを促している。

このように第一号は「屋敷の掃除」という表現で中山みきの周囲で展開する具体的な人間模様を扱っているが、それと並行して、あるいはその場面を題材にして「万世の世界を見晴らす」などの表現によって「せかい」に対して親神の思いを述べている。とりわけ最後の十数首で「屋敷の掃除」というテーマにおいて「うち」という言葉を使っていることは示唆深い(第五十八首)。というのも「うち」に対して「外」ではなく「せかい」と述べられていることから、「うち」(屋敷)というものが同心的に「せかい」に含まれていると解することができるからだ。つまり、「内/外」という区別ではなく、「せかい \geq うち」というあり方で「せかい」と「うち」が区別されて、詰まるところ「せかい=うち」とも捉えることもできる。